会・高度情報化社会・都市化社会・学校教育の荒廃の問題を始めとして、子どもの育ち方や家族関係、人間性疎外や感情の不安定さ・孤立といった問題に深く立ち入っている。民話運動の今後についても、これらの現代社会の諸要素と切り結ぶ姿勢が求められるのである。

民話の世界は素朴な魅力に溢れている。本書には、土地の言葉で民話を伝承してきた語り手の語りについて語ったエピソードが多く述べられているが、それらの語り手と著者は真摯に向き合い、信頼し、あたたかく見守り、また謙虚に学ぶ姿が随所に浮かび上がる。佐渡の優れた語り手であった松本スエさんの「当たり前だ。サルの奴は殺さねばなんね」という言葉から民話を伝承する心を説き起こすところ（三二ページ）に始まり、要所要所で、語り手が語った言葉をもとに「伝承の心」というものを拾い出している。堅くならず、あたたかい著者の視点が読者に伝わる部分である。本書が、昔話研究者の見落としている点を、多々掬い上げていることを、高く評価したい。著者が本書で、生きている人間としての語り手を問題としているところに、私は大きな感銘を受けた。

この拙文で、一方的に「語り」について取り上げたことを、著者にも読者にもお許し頂きたい。何故なら、私は語り手の末席に連なる者で、その立場からの発言を、まず表明しておきたいと思ったからである。

最後になったが、本書の目次を挙げて責任を果したいと思う。

Ⅰ　民話を伝承する心

いまなぜ民話か／民話とは・再話とは／殺されるサル――生産者の視点／ニワトリが鳴くとなぜ鬼や天狗は退散するのか――時間の習俗／盗人の神様――伝承する人の心／笑わぬ女が笑ったとき――事実と民話との距離／ふるやのもりは本当に怖い――生活に根ざした伝承

Ⅱ　語りと再話をめぐって

民話の伝承と再話／再話の岐れ路／民話の採訪・記録と民話運動――福島県国見町の採訪から学んだこと／民話運動からみた「語り」／採訪と記録の心得

Ⅲ　語り手たちとその語り

雪深き里の炉端の語り手・宮下石之助さん／佐渡海府の語り手たち／遠藤登志子さんに聞く

（白水社、二二八頁、二〇〇〇円）

（さくらい・みき／語り手たちの会）

書評

モノとしての「話」

～佐藤健二『流言蜚語』から

重信幸彦

1、「都市伝説」研究の不幸から

口頭伝承研究や民俗学において現代の日常生活が産出する「話」を素材にすることは、さほど突飛なことではなくなった。都市伝説、現代伝説、都市の世間話等々、対象化した「話」に付された名称の差異は本質的な違いではない、としておこう。だがこうした動向は、これまでの民俗学／口頭伝承研究を再

検討しながら、我々の同時代を語りうる言葉を模索するという問題意識が、ある程度共有され始めたことを示しているのだろうか。こう問い直してもいいだろう。我々はこうした「話」の研究を通して、いったどれだけ現代という「時代」を語り得たのだろうか。ぼく自身の反省もこめて、我々が抱えている問題点を確認することから始めたい。

指摘すべきは、対象化した「話」が現代という「時代」に拘束された産物であることを、〝どのように〟語るかを問わずに、「話」を解釈してしまう危うさだ。たとえば、怪異や不思議を語る都市伝説は、自然を失った我々の「不安」を表出したものであり、また子供たちが学校という場で好んで怪談を語るのは、管理化された学校のなかで疲弊した日常を彼らが異化する行為だと解説したとしよう。しかし〝自然の喪失〟や〝管理化された学校〟など、口頭伝承研究や民俗学がどれだけ責任を持って語りうることなのだろうか。また、現代の日常生活は道具（メディア）の仲立ちによって拡大したリアリティに支えられており、その拡大したリアリティと、我々が身体的レベルで認識できるリアリティとのギャップのなかに「話」を創出していく想像力が胚胎する、という考え方もしばしば語られる。しかしこうした図式自体が、そのまま個々の「話」に対する解説になるわけではない。この図式は、それぞれの「話」に刻まれた道具（メディア）と我々の日常の関わり方の歴史＝時代性を具体的に掘り起こす作業を通して、初めて活きる。その手続きを経ずに〝拡大したリアリティのなかで活きる現代人の「不安」〟などを語ってしまうとしたら、それは先の〝自然の喪失〟や〝管理化された学校〟と同程度に危うい。

こうした実質的に閉塞した状況に対して、歴史社会学者・佐藤健二の『流言蜚語：うわさ話を読みとく作法』（有信堂　一九九五）は、一つの可能性ある方向を開示してくれている。佐藤が問題を構成していく手つきのなかに、我々は幾つかのヒントを見つけ出すことができるはずだ。本書は四章に分かれ、第一章「民話の抵抗力」と第二章「資料の形態を読む」では、戦時中に編まれたある「流言」資料を分析、第三章「うわさ研究のフォーマット」は、「うわさ」研究の展開を整理しつつ佐藤自身が「話」を素材化する方法を語る。そして第四章「クダンの誕生」は民俗学でもこれまで何度か議論の対象になった「クダン（件）」を分析している。ここでは、主な論点を拾いながら、佐藤の問いかけを我々自身の問いとして位置付け直しておきたい。

2、モノとしての「話」へ

我々は、自分達がある種の「話」を都市伝説、現代伝説などと名付けて素材化することを、ごく当たり前の行為だと考えている。しかし佐藤は、「話」を素材化するその視線のありかた自体を問うことから、「話」を読み解く筋道を引こうとする。佐藤の言葉に従えば、本書を貫くのは「具体的な素材―資料のありように対するこだわり」であり、「紙のなかの声」を読むための「素材感覚」を方法として意識化する姿勢だ（二頁）。

第一章、第二章では、社会心理学者・池内一の手元に残されていた、太平洋戦争時の流言調査データの紙束が素材となる（そのデータの全容は、南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌四　流言』三一書房　一九八五に翻刻されている）。我々は、こうした素材を前にすると、怪談として括れそうな「話」や予兆を

語る「話」など、これまでの研究の蓄積から解釈できそうな「話」だけをピック・アップしがちだ。しかし佐藤はそうした恣意的な素材との関わりを拒否する。まず「内容分析とは異なる、資料の形式・形態分析」を通して、その紙束がどのような「場」をくぐり抜けて現在に残されるにいたったかを明らかにする。それは「モノとしての「話」」とでも言うべき論点を構成する。そして、その時なぜそうした流言調査がなされる必要があったのか、それはどのような視線によって遂行されたのか等を掘り起こすことから、そのデータが作成された時点で帯びていたはずの「同時代性」を手繰ろうとする（第二章）。

その流言のデータが知能検査、能力検査のテスト用紙の裏を再利用して筆写されていることを手がかりとして、この紙束がどのような経緯で生み出されたかが明らかにされる。まず、憲兵隊司令部により「造言飛語」の捜査・取り調べ活動の報告書が作られた過程があり、次に海軍技術研究所心理研究部の戦争心理対策本部が、その憲兵隊資料を借り出して書写した過程を経て紙束が生み出された。この憲兵隊という「場」には、戦時下の日常における「民心動向視察」の一つとして「流言」の調査・取り締まりを通して、軍が日常のコミュニケーションを管理する制度を整えていく歴史が刻まれていた。そして、その憲兵隊の流言資料を海軍技術研究所の心理研究部が借り出し書写していく「場」には、それまで主に個体の能率増進のための研究を展開していた応用心理学部門が、敗戦直前に「謀略戦、思想戦、特に流言、恐怖、暴動、宣伝技術」等の社会心理研究へとシフトチェンジした背景があった。つまり流言資料は、戦時体制下の日常を覆っていく軍の「防諜」思想の視線と制度により対象化され、さらに「総力戦」のなかに組み込まれた「心理学」の文脈に再度位置付けられるという過程を経て、現在に残る素材となった。我々はここに、「時代」の視線が交錯する「場」で、人々の「話」が「流言」と名付けられて対象化され編み上げられていった過程を見出す。こうした手つきは確かに歴史家の史料批判のそれに似ているかもしれない。しかしだからと言って同じだとしてはなるまい。歴史家の客観的史料主義の史料批判とは異なり、佐藤の実践は、資料のありかた自体が「解釈」を必要とする対象であるという前提に立っていることを押さえておきたい。

「話」を読みとく地平はこうした作業の上に拓かれる（第一章）。そこでは「ラッキョウを食べると爆弾にあたらない」といった「話」、神様が身代わりになって出征した「話」、戦争終了の予言をめぐる「話」など、民俗学にとって比較的馴染み易い、つまり「伝承性」を手繰りやすい「話」が俎上にのせられる。しかし佐藤は、「伝承」という語がしばしば時代を越える「連続性―不変性」を前提に歴史―伝統というタテの方向からのみイメージされがちなことを批判し、タテーヨコすなわち歴史性と社会性を厳密に区分しうる本質的差異であると考えることは、生産的ではない、と指摘する。「時代性」を問わずにタテの系譜のみをたどっても「歴史」は描き得ない。

その分析は、「話」を通して特定の「時代」に拘束されてに展開する社会意識を描く方向へ向かう。たとえば、ラッキョウの「話」のなかで語られる「爆弾」という要素の「時代性」が手繰られる。「爆弾」即ち「空襲」は、戦闘員／非戦闘員の区別が消滅する「総力

戦」が日常生活のなかで視覚化、具体化することを意味しており、その「総力戦」の構造が「話」を生み出す集合性（公衆）を形成したことが示唆される。また、こうした〝××を食べると空襲に合わない〟といった呪術性を持つ「話」や、終戦の予言を語る「話」のなかに、戦争を「天災」として受けとめてしまう受動的な想像力の存在が読み取られ、それは「抵抗」を育む「話」や「民衆の本音」を語る「話」というより、むしろ翼賛体制原理が日常のなかで顕現する様を示しているという「読み」が提示される。

そうした「話」の「時代性」を掘り起こすことによって示される「読み」は、民俗学や「民話」研究がしばしば無前提に寄り掛かりがちな「民衆至上主義あるいは常民万歳思想的な観点」（八頁）のイデオロギー性を浮かびあがらせる。「流言を、「真理」の操作により統制回収しうる幻想とする流儀が危険であるの同じくらい、民衆のホンネの自然発生的な反乱というイメージによりかかるのが危険である」（三二頁）という佐藤の指摘は、実は、「モノとしての「話」」を問うた視点と重なっている。

「流言という概念自体が、歴史的な形成の時点と場を持つ。それは、たとえば戦時中の資料において「造言飛語」と漢字表記され、また多く「デマ」と等置されて非難されたように、どこかで真理や真相を独占する権力のまなざしを内在化している。それは柳田国男たちが「世間話」や「民話」として発見し対象化しようとしたものと、どこかで対抗し、どこかで共犯関係をむすんでいるように思える。」（vii頁）

こうした思考は、憲兵隊が「流言」を対象化した視線と民俗学的思考が「話」を対象化してきた視線を併置し、双方を「時代」の視線として問うことを可能にするはずだ。

3、「時代性」または「歴史」を問うために

第四章「クダンの誕生」は、佐藤の「モノとしての「話」」を読み解く実践であると同時に、これまでの我々の口頭伝承研究がどのように「話」を対象化してきたかを批判的に検討している。まず「この学問がえがきだす口承のプロセスと「話」の説明」が、「平板」であるという印象が語られ、我々に対して次の三つの疑問が突き付けられる。第一に「話されたものに作用している時代＝現代を、構造的にとらえる努力をおこたってきたのではないか」、第二に広義の内容分析（類型分類や話想の構造分析）に関心を集中し、「テクストが生成する場についての考察を周辺部に追いやってきたのではないか」、第三に口承性と伝承者にこだわり「それ以外のメディアの力に対する考察をほとんど組織化してこなかったのではないか」（一五一～一五二頁）。

そして佐藤は、柳田国男の口頭伝承研究を読み直しながら、「ハナシ（話）」という表現様式は「新しいことばを生産する生産様式」を意味し（一五二頁）、「昔話」と「世間話」はその「話」として括られる様式の「楕円形の二つの焦点」であり、ともに等しい重要性を担わされていたことを指摘する。この「二つの焦点」の差異は「内容」の差異ではなく「話」の「場」のありようの差異であり、そしてその「場」を問うことが「説話の社会史」への道を拓く、という。ただし佐藤のこの「場」への問いは、しばしば口頭伝承研究が特権化してしまった口承の上演の「場」のみを指してはいない。それはむしろ

「書かれたもの」や「演じられたもの」の交差を読み解くメディア論を指向し、特に、聴き手や読者が「話」をどのように受け取り、その「場」の文脈を創り上げたかを問うことから、「話」に刻まれた「時代性」を析出する方向性が示される（一五六～一六四頁）。

クダンは、口頭伝承研究に対するこうした方法的批判を上演する素材として選ばれた。佐藤はまず、近世末期にかわら版という「モノ」に具体化されたクダンの「図像」に寄り添う。当時、お守りの絵図を描きうつすという受け手の身振りのなかで流布していた他の「予言するもの」の図像とクダン像との関わりが読み取られ、特に旅行のお守りとして流通していた白澤がクダンの図像に引用された形跡がたどられる。また「話」のなかに現われる、見ること、書き写すことの呪的効果を語る言説が、当時の引き札や見せ物（開帳）という「場」と重なりあうことが示される。そして何より、クダンとは「よって件の如し」という書き言葉の決まり文句の「件」を絵解きした「話」であり、それは、この「話」がそうした「文字」の力が作用する「場」で形成されたことを示している。かわら版、引き札や見せ物というメディアが関わり、そして「文字」の知識を前提にした読者や聞き手の創る「場」のありように拘束されてクダン像が形成されたところに、この「話」にメディアが刻んだ「時代性」が手繰られることになる。

このクダンの分析にしろ戦時下の流言の分析にしろ、「モノとしての「話」」のありようを問うことから「話」のリアリティの「時代性」を掘り起こすところに、佐藤の一貫した態度（＝方法）がある。またそれは、話型の一致をもって「伝承性」を手繰るような伝承論ではなく、メディア論を前提に「移動、変形、結合、分離、堆積等々」（一六三頁）を論ずることで展開し得るもう一つの伝承論への筋道でもあることを確認しておこう。そして、ともすれば「話」のなかに「心」や「深層」を手繰る早上がりをしがちな我々に対し、佐藤は徹底して「モノとしての「話」」、即ち表層にこだわることから「時代性＝歴史」をたぐる作法を見せてくれた。

この問いかけを我々はどう受け取ることができるだろうか。たとえば、ほとんど社会現象と言えるまでになったあの「学校の怪談」を、どう分析するかを考えてもいいかもしれない。どこかで聞いたような現代批評を拝借するのではなく、「話」を普及させた廉価な書籍形態が読者＝子供の日常的経済（お小遣いのリアリティ）のなかで持つ意味とか、読者＝子供をこの現象に組織化し「話」を醸成する過程を担った「投書」という仕掛けの働き、といった「モノ」としての「学校の怪談」を考える筋道も拓かれるはずだ。

（しげのぶ・ゆきひこ／市立北九州大学）